

カラスに転生した

MK/シュウ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦これの転生モノで動物に転生してるのが見当たらなかったので書いてみました。

注意

序盤艦娘は出ません。

アーマードコアとかエースコンバットなどのゲームネタを含みます。

転生者はだいたい動物（少しは人間もいます）。

主人公含めて転生者チート付きです。

以上の事があっても別に気にしないよって言う人は、どうぞ。

目次

カラスに転生した 梟に襲われた。	1
別の転生者	10
転生したらしきヤツら	16

カラスに転生した

どうも、只の中学3年です。

受験勉強の途方の無さに明け暮れて、帰り道を歩いていたら、カラスが轢かれそうになっていたので助けました。

…まあ、自分は死にそうだけど。

皆さんなら、カラス如きどうでもいいじゃん、むしろ死ねと思うだろう。

俺はそうは思わなかった。

雀も、目白も、カラスも所詮は鳥だ。ならば平等に愛すべきなのでは？

それに俺はカラスが大好きだ。

あーあ…せめて生きている内にエースコンバットやりたかったなあ…あとラストレイヴンのラスジナ倒してない…それに艦これのイベント制覇してない…

目が覚める。

辺を見回す。

なんか枯れた植物っぽいのに囲まれている。青いのはなんか金属っぽい…ハンガーかな？

自分の姿を確認する。

なんかピンク色の体。腕に相当する部分が手羽。

バサバサと羽音がする。

音がした方向を見る。

カラスだ。

くちばしの太さからしてハシブトガラスだろう。

結論。

ハシブトガラスに転生した。

とりあえず、お腹空いたからご飯ください。

.....

斯くして、俺はハシブトガラスの三男坊として生まれたのだ。

最初のうちは、食べては寝て食べては寝ての繰り返し。

三ヶ月もすれば黒い羽が生えた。

で、その間にいくつかわかったことがある。

自身のスペックが何故か確認可能なのだ。

現在がレベル2、保持スキルが燃費向上。レベルが1上がることによつてスキルが1つ追加されるようだ。

次に、レベルは食事、狩り等で上がっていく。

そしてスキルにはスキルレベルが設定されており、任意のスキルを使つていく内にそれは上がるということだ。

尚、燃費向上とは簡単に言えばお腹が空きにくくなるのだ。

特に餌の少ない冬の時期にはすつごい便利。でもあくまでも腹が減りにくくなるだけだから、餓死の可能性もある。

で、いつ空を飛べるようになるんだっけ？

「とりあえず巢の外に出てみるか。」

一応人間語で表記してあるが実際はカーカー言つてるだけです。悪しからず。で、実際出てみたっけいつも見ている風景とは違った。

木の中間部から見た風景は、少し違った。木の天辺から見るとの清々しさは無い。だが、人間の頃じゃ味わえない風景。

「…良いじゃねえか。」

ああ、飛ぶのが楽しみだ。

これからの未来が尚更楽しみになった。

そのときは知らなかった。これから自分がある戦争に巻き込まれ、その中でとんでもない奴らと出会うことを。

梟に襲われた。

さて、俺は三歳になった。ちゃんと空も飛べるし餌も取れる。

だが、夜は行動できない。

何故かって？

それはフクロウがいるからだ。

カラスの天敵は、意外にもフクロウである。まず、カラス全般は夜目が効かない。そして飛行能力は高くない。むしろ普通である。

そしてフクロウは飛行能力が高い上、夜目が効く。まあ夜行性だしな。

そしてカラス中でも有名であろう銀の星もフクロウの手によって最後を迎えた。草食のフクロウにさえカラスは警戒する。ハシブトハシボソ関わらずである。

故に、フクロウはカラスの天敵である。

流石に死にたくないの、いつもは寢床で寝てるが…

「ちくしょうめ…」

落ちた。気づいたら落ちてた。

さて早くもどらないと…

ほうほう

悪寒。警戒レベルを最大限まで引き上げる。各感覚を澄ます。

どこから来る…

ばさ

後ろか！

右に転がって回避する。

現在持つているスキルで夜目の効かなさは克服した。故に、しっかりとフクロウを捉えた。

フクロウが急旋回してこちらへ向かってくる。

「手間あかけさせるな」

フクロウがそう言い、足を出してこちらを仕留めようと襲いかかる。

ジャンプして回避。

その跳躍は普通のカラスにはできない高さ。

そのまま、背中にしがみつく。

離せと言わんばかりにフクロウがいろんな機動を取る。

「いい加減に落ちろ！イレギュラー！」

それでもしがみついて…嘴をフクロウの首に叩き込む。

カラスとは、到底思えない鳴き声。
それが、夜の空に響き渡った。

彷徨つてるとき、そいつを見た。

かつての職業と同じ名前の鳥。

ああ、自分が憧れたのはこれだったな。

俺は、この時、かつて自分が望んだ目標を思い出した。

.....
転生して以来、変わらないと思った毎日が、変わった。

恐らくあれはハシブトガラスだ。

だが、所々が異常に発達してる。

あれが転生者であれ、進化した鳥であれ、初めて面白いと思えた。

只の識別番号じゃ面白くない。

名付けるならば『Night Crow』が妥当だろう。

こいつは、絶対、面白いと確信した。

別の転生者

俺がカラスのようなものになって以来、ヤケに同族にビビられるようになった。因みに長兄が俺を見たときは卒倒した。

まあ、こんな身体じゃモテるところか化物扱いなので、独り立ちした。

多分、もう三歳だし独り立ちしても大丈夫だと思う。

まだ嘴の中が赤いガキだが。

因みに、カラスは群れの中で強い個体がモテる。

その上離婚率が低い。

以上、豆知識。

そういうえば最近視線を感じるんだけど…何でかな？

今日も『Night Crow』は独りだ。

こいつを発見して以来、僕はこいつを観察している。

発見したのは一ヶ月前だ。

夜分、森の中で鳥の生態を調べてたら梟を仕留めた小ガラスを見つけた。すると、小ガラスの身体は急に変形しだした。

最終的には猛禽類より……いや、今まで見てきた猛禽類より禍々しくなった。

羽の黒さと嘴の原型からかろうじてハシブトガラスと認識できる。

僕は2つの仮設を立てた。

一つは、ホントの本当に突然変異。

もう一つは、僕と同じ転生者であるという事だ。

僕は前世はただの女子中学生だった。と、言ってもオタクの類ではあった。

この世界に転生して、親は共働きで暇だったので、鳥の観察を始めたら、意外と面白かった。

カシャン

ベランダに何か当たる……いや、音からして着地？

ベランダを見てみると……

「……………」

「?!」

『Night Crow』がそこにいた……と言うかこちらを見てた。

.....
ふむ、こいつが視線の主か。

何か畏怖とも違った人間の視線だから来てみれば……なんとまあ中学生ぐらいの女子
じゃありませんか。

「ど……どうして!?! 気配消去は使ってたハズなのに!?!」

「カ!?!」

気配消去? ひよつとして転生者?。

「……ひよつとして……僕の言葉に反応? いや、理解している?」

察しがいいな。にしても僕っ娘か……アリだな。

取り敢えず頷く。

「!?! やつぱり……じゃあ……君は転生者?」

頷く。

「じゃあ……喋れる?」

勿論横に振る。

「筆談は?」

頷く。行けるかどうかはわからないが。

「じゃあ……」

僕っ子がベランダの窓を開ける。

ありがたく入らせて頂こう。

一礼して、開かれたベランダの窓に入った。

.....
(さて、部屋に入れてしまったが…なんと呼ぼう)

紙とペンを用意しながら考える。

今考えてるのは彼をどう呼ぶかだ。

取り敢えずそれは置いといて、彼の前に紙とペンを置く。

彼が脚で掴み、文字を書く。

「ありがとうございます。ところで、なんとお呼びすればいいでしょうか。」

「緑崎夜目。夜目でいいよ。」

「わかりました。やめさん。今はひらがなやカタカナしかつかえないのでごりようしようください。」

「わかったよ。じゃあ…何時ぐらいに生まれた？」

「さんねんまえです。さんねんまえにフクロウにおそわれて、ぎやくにたおしたらこんなからだになりました。」

襲われて…倒す？

「スキルの影響ですか？」

「おそらくそれです。それとレベルがあがったのもあるとおもいます。」

レベルって…あつたんだこの世界。

俺がこの僕っ娘…いや、夜目からの質問を受けて一時間ちよい経った。

夜目もどうやらオタクの類だったそうさ。

しかもSTGの方が得意だとか。

どうやら既にスキルの事も知っており、その内容は『気配消去』と『観察強化』と『R開発』だそうさ。

『気配消去』は、シンプルに自分の気配を消す。レベルも上がりやすいが、それ以上の索敵系スキルには効かないそうさ。そう聞くと何かゲームっぽい。

『観察強化』は、文字通り観察力に関わるモノ…目や集中力を強化するモノだそうさ。

『R開発』は、なんとSTG『R—TYPE』にでてきたR—戦闘機を作れるというモノだ。しかも元々の人が乗れるサイズからラジコンサイズまで自由自在だそうさ。

本人はR—TYPEはちよつとやったことがあるだけと言ってるが、真偽は定かでは

ない。

尚、俺につけられた『Night Crow』はエースコンバットのオリジナル機体『X-49 Night Raven』から取ったそうだ。キース挟み機とか言っちゃいけない。

「ところで…」

「はい、なんででしょうか？」

「『Night Crow』だと呼びにくいから…『クロ』って呼んでもいいかな？」

おお、あだ名か…：そーういやあだ名で呼ばれたことってなかったな…

「べっにかまいません。」

実際嬉しいです。

「あと、敬語じゃなくてもいいんだよ？」

「では、おことばにあまえさせていたどころ。」

「じゃ、これからよろしく、クロ」

「おう」

紙に返事を書いて、差し出された手を翼で握り（？）返した。

転生したらしきヤツら

さて、あの日以降時々夜目の家に来たりしている。

「どうやら最近、夜目が『転生者感知』なるスキルを手に入れたようで、現在わかっている転生者を教えてもらった。」

「先ずは、『蛇』についてだ。ぱつと見カナヘビっぽいのが、カナヘビにはない特徴があるので詳細は分からない。」

「カナヘビ…」

爬虫類の転生者もいるのか。だとしたら両生類や魚類の転生者もいそうだ。

「あと特徴でバンダナを巻いている。」

「ダンボールに潜んでそうだ…」

脳裏には某潜入ゲームの主人公がよぎった。

「次、『エビフライ』について。どう見てもオオスカシバ。でも通常のオオスカシバより素早く、鱗粉に認識阻害効果もある。」

「ゴジマ粒子ってよりはGN粒子みたいだな。」

「因みに自己防衛で鱗粉を収束、ビームみたいなモノを撃ってた。」

「鱗粉とは（哲学）」

因みにオオスカシバはスズメガの類だが蛾とは思えないほどかわいい。

「次、『赤鷹』。鷹だけど翼が前進翼見たくなっている。そして赤い。こいつもビーム…というよりはレーザーが撃てる。」

「鷹…ADF—01かな？」

脳裏にはエースコンバット5のTAS動画がよぎった。TLSであんな芸当ができるのはTASさんか変態ぐらいだと思う。

「次、『赤鷲』。羽毛が赤い事以外は普通の鷲。こいつもレーザーを撃てる。」

「鷲…ADA—01かな？エースコンバットの機体が動物化するだなんて…怖い。」

そのうちワイバーンとかア二機とかイカとか出そう。

「次、『リボン付き』。一見ただのハヤブサ。でも、右翼にリボンのような柄が付いている。」

「リボン付き…まさかメビウス01とかじゃないよね？」

「あり得る。」

できれば、会いたくないなあ。出会ったらデス・ノボリが立ちそうだ。

「次、『カプト』。カプトムシだけど黄色い。そして角からミサイルが出る」

「む…っ。」

ついに生物かどうか怪しくなった。

「ついでに体内に正六角形の熱源。」

「…メダロットかな？」

「ありうる。」

『カブト』、非生物説が濃厚になった。

因みに俺はメダロットだとシアンドックが好きです。

「今のところはこれぐらいかな。」

「人外ばっかだな」

「誰でも人間に転生できる訳じゃ無いからね」

「ご都合主義なんて無い。」

その後、夜目の家を出た。

とくに何も食べなくて良いのでしたら早く海沿いを巡回飛行する。

すると、遠くから機械音。

いや、プロペラが空気を切る音だ。

音の主が視認できる距離まできた。

その体は真つ黒だった。黒の中でもどす黒く、底の見えない色。

その体は機械的だった。なおかつどこか生物的でもあった。翼と思わしき部分には爆弾らしきもの。体の下部には機銃と思わしきモノ。

そして、そいつは機銃を撃ってきた。

「あぶねっ」

ブレイクして回避する。俺がただのカラスだったら確実にただの死体だっただろう。

こいつがどういう存在で、どんな目的があるかは解らない。

でも、俺にとって敵でここで仕留めないと俺が死ぬのは理解した。

機銃もなく、ミサイルも特殊兵装も無い。エースコンバットだったら詰みだ。

でも今は近接攻撃ができる。近づけるかが問題だが。

「クロ エンゲージ」

小さくつつやき、ほぼ無理ゲーな戦闘に突入した。